

わが表現法

谷崎 昭男

1. 私は、大学院生のときに「超克」という近代日本の造語の由来を辿ってみたのを契機として、言葉には嵩、響き、表情とでもいうべきもののあること、また、人はそれらに惹かれて一つの言葉に捕らわれる場合もあること（「超克」という語の流行は好箇の例）を了解した。が、表現の問題は、そういう個々の言葉のもつ事情とは別に、それらが合わさった全体の造型を問う——表現はどうあるべきかを問う——ところになければならないと考えている。

2. 私が、文学において最も重要と考えているのは、その作品がどれだけ生きる力を奮い立たせてくれるか、今風に言えば、その作品から元気をもらうことができるか否かということであり、そして併せて、そういう作品こそが文学において最も大事にされなければならないということである。そういう観点からすると、一つの言葉に惹かれてそれを何度も使うというのは、必ずしも表現のためにはならないと考える。

3. 例えば、私の先師である保田與重郎の文章、あるいはレジュメにあげた佐藤春夫の文章は、そういう生きる力を奮い立たせてくれるものがある。それゆえ、私は二人を尊敬するが、しかし、どうしたらそのような文章を書くことができるのか。私の課題であるが、自信を持ってそ

れができたというふうには、残念ながら思えない。

4. 文章は、レジュメに記したように、それが蔵す一塊のエネルギーで読者を打つという観点から、そのエネルギーを蓄えるために、私は改行をするのに慎重である。400字ぐらゐは改行しないでセンテンスを繋ぐ。上記の同じ観点から、ときに短いセンテンスを挟みつつ、構文に変化をもたせた長めのセンテンスを綴って、全体として一箇の造型たらしめるというのは、私のする工夫の具体的なひとつである。

5. もうひとつ、これまでの歩みに関わらせて述べれば、学生の頃に福田恆存を愛読したことが、私の文章に対する考え方に大きな影響を与えた。現代仮名遣いに批判した『私の国語教室』に啓発を受け、手紙などは歴史的仮名遣いで書くようになる。その後、論文、批評へも用い始め、10年以上が過ぎた。歴史的仮名遣いと、それに従って文を作る側との間の緊張関係とでもいわるべきもの、そこから生々として新しいものが産まれるとき、文学は初めて創造となると私は商量する。

6. そのほか、感嘆符などの符号を用いない、基本的には縦書きとする、漢字と仮名の交じり具合をはかる、などにも配慮をしている。

（相模女子大学 梅林博人）